

る本書を繙かれんことを。

最後に、今後單に日滿支に限らず、タイ・佛印等を含む東亞其
 樂園の研究調査を期待して、此の拙劣なる紹介の筆を擱く。(大判
 三二四頁・昭和十六年(年四回發行)弘文堂書房發行、三四五〇錢
 [中田榮一])

忽必烈汗

愛宕松男 著

今事變始まつて世人が蒙古に關心を持つやうになつた狀勢に
 「便乘して」幾多の蒙古關係の書籍が世に送られて居る。その中で
 最も注目すべき現象は成吉思汗に關する翻譯・紹介・研究の多い
 ことである。成吉思汗が蒙古帝國最大の英傑である事は今更云ふ
 までもない。この人物に關する研究は當然行はれて然るべきであ
 る。しかし我々が一旦よく詳細にそれらの研究を検討すると、中
 には暗に政治的意圖を持つた宣傳の書であつたり、破壊者とし
 ての汗の一面を強調したりし、その材料の限られて居る事情等も
 手傳つて、甚だ不満を感じしめるものが少くない。結局そこには
 成吉思汗が、英雄であり軍人である事よりして偶像化されると云
 ふ事に終つて居るのである。我が國人の間にも歐人の研究に優る
 とも劣らぬ研究をなさんとして居る人も少くない。しかし蒙古帝
 國に於てその具體性に於て、その建設性に於て遙かに成吉思汗を
 越し、いはゞ當時の蒙古人として最高の政治的能力を示したと考

へられる忽必烈汗に注意を拂はないのは如何なる理由によるもの
 であらうか。成程彼はその祖父ほど他國を滅しもしなかつたし、
 國土を膨大にもしなかつた。その點甚だニユース・バリユーはな
 い。しかし忽必烈汗は破壊者としてよりは寧ろ建設者として、英
 傑としてよりは經世家としてその東方帝國に於ける帝王としての
 地位は絶對である。著者が未だ全然傳記として成立して居ない此
 の大汗に關して一書を世に送られた事は實に此の點よりして重要
 な意味を持つて來るのである。

忽必烈汗と其の時代とは蒙古帝國史上一大轉換期として人皆そ
 の意義を認めざるはない。即ち成吉思汗によつて一應肯定された
 ものは此の時代に至つて否定の傾向へと走つて居るのである。成
 吉思汗の遺産は拖雷家の蒙哥汗の出現により急速にしかもかなり
 不自然に中央集權を強化して居る。社會的現實を基礎とした制度
 として組織されるには今少しく時間が必要なる所であつた。蒙哥汗
 の急死はいはゞこの大帝國にとつて一種の危機として現れて來て
 居る。例へば大汗の位の繼承法の未確立、軍政民政の不分離、巨
 大な封建諸勢力の殘存其等は大汗の側の記録として殘されて居る
 我々が普通使用する史料には大きなものとして記されては居な
 いが、生きた社會全體として我々がそれを理解せんとする場合に
 は其等の諸問題は輕々に判斷出來ないものを持つて居る。現存史
 料の小さい相似形を以てしては單純に片付けられないものがある。
 和林には阿里不哥、トルキスタンには窩闊台の孫海都と察合
 台の孫アルグ、欽察には朮赤の子ベルケ、イランには旭烈兀が居

た。南宋討伐の第二軍を率へて進撃途上にあつた、忽必烈も亦東方大總督として漢地を地盤とする一大勢力であつた。拖雷家の人には和林以外に適當な寓居を見出し得なかつた。此處で彼等は西域支那の人々と接觸した。忽必烈も此の例にもれない。彼が蒙哥汗をウイグリアに遷都せしむべきを唱へたのはその本來の生活よりして充分薩商的商業民乃至は遊牧民に多くの共鳴と信頼とを勝ち得ると考へたからであらう。その種々なる接觸面より遊牧的なものより商業的なものへの理解と關心は擴められたであらう。が彼の偉大さは彼の心が更に進んで農業的定住的なるものへの理解へ向つた點にある。蒙哥汗は拖雷家の所領として南は支那、

西はイランをその征服目標に定めた。忽必烈はかくして支那に根據を持つ蒙古貴族として出發せしめられたのである。彼の周圍には漢人が集り、彼は漢人漢文化の保護者として仰がれた。成吉思汗はクリルタイによつて其の地位を確保したが忽必烈汗は同じく之によりしかも精神的には既に之を否定して居る。阿里不哥、海都との抗争は成吉思汗の遺業を根柢より動搖せしめた。東西交通の杜絶、政治經濟文化各般にわたる著しい閉鎖性其等は蒙古帝國の彼方此方に發生して居る。忽必烈は大汗にはなつた。がそのなつた途端に彼は實のない大汗より實のある支那皇帝へと「落ち」ざるを得なかつたのである。蒙哥汗死後に於ける彼の行動は正に蒙古帝國に於ける漢地分離運動と云ふ結果になるものであり、従つて彼は畢竟東亞の一帝王としてののみ終止する事になるのである。忽必烈汗のもとに支那的國家の體制と内容を具へた蒙古人政權そ

れが元朝と呼ばれる所のものである。成吉思汗は毀滅し得べき群小の有を殆ど無となし、而してそれより全體の有をかたちしたのであり、忽必烈汗は毀滅し得ない群小の有を現實として認識し全體の有として確實に把握したのである。

かくの如く考へて來ると忽必烈汗の史上における位置はもはや餘言を加へる必要を認めないであらう。本書の内容は一「蒙古帝國」として帝國の成立から蒙哥汗死後の解體の危機まで、二「忽必烈の生ひ立」とし拖雷家の一員としての彼の知的生長、三「忽必烈汗として諸王としての忽必烈の政治生活からその死にまで至る。特に三の「忽必烈汗」は、諸王として、大汗として、大元皇帝としての彼忽必烈を歴史的に解釋し、結局彼は蒙古から支那へ而して支那から蒙古へ歸る人間として最後に一轉して蒙古人としての忽必烈なる一節を設けて居る。實にその舞臺構成から幕切まで綺麗に設置せる所敬服の他はない。著者は先づ忽必烈を本來あるべき蒙古人としての忽必烈理解より出發して居る。其の方法に於て正當なるものは當然なる結果を將來する。蓋し彼は最初から元世祖であるのではなく忽必烈としてあり、忽必烈汗としてあり、世祖としてあり同時にセチエンハガンとしてあつたからである。本書に元世祖の事蹟のみを求めたならばそれは必ず失敗する。本書の題に「元世祖」でなくて「忽必烈汗」が與へられて居る事は漫然と看過してはならない。從來支那皇帝としての一面のみ考へられがちであつたこの君主に強烈なる蒙古性の存在する事を的確に示された點は著者の一大功績である。小冊子ではあるが本書は他面

學術的價値を充分そなへたものと云つてよい。忽必烈汗を英雄化したり、神格化したり溢美の言を振はないだけでも著者の態度は好感が持てる。

但難を云へば文章が稍々概念規定的な用語——これは著者の特徴で論文用語としては非常に成功して居るのであるが——の使用、我々日本人として忘るゝ事の出来ない元寇の問題——之も實際の所真相はしかく明瞭なものではないが——を五六行で對宋交渉の末尾に付した事等は本書が一般的讀物たる事を目的として居るだけに惜しまれてならない。大都を Kanbaluc と傳へたのは西方人であるが之が何國語の訛であるかも一應記しておいた方が一般讀者に親切であらう。本書が蒙古人としての忽必烈を正しく認識して居るのは前述の如くであるが同時に支那皇帝としての彼の地位も尚若干考へられてもよいであらう。近世支那の政治の特徴たる所謂君主獨裁權は此の大汗とは如何なる關係を持つものなのか。蒙古大汗であると同時に大元皇帝である彼、その政治的性格はアレキサンダーやアウグストゥスと同様我々の最も興味をもたしめられる所である。此の間に對する明確な解答はこの場合要求する方が無理であらうか。些々たる聖理や、より困難なる事を擧げ望むのは讀む人間の惡癖かも知れぬ。が評者は本書についてかゝる點を指摘するより他批判すべき言葉をもたない。既に淺野忠允氏は『蒙古』五月號に於て筆を極めて本書を推賞して居られる。東亞關係の惡書多き當世、自分も亦自ら感ずる所に從ひ、良書中の良書として大方の一讀を御奨めする次第である。妄言多謝。(支那歴

史地理叢書第十 昭和十六年一月 富山房發行 定價壹圓貳拾錢)
〔佐藤長〕

王安石

佐伯 富著

畏友佐伯富學士の「王安石」が支那歴史地理叢書第十一冊として上梓された。

王安石と言へば一度東洋史を學んだことのある人達は何か彼について記憶してゐるであらう。それ程有名な人物でありながら實は過去の多くの王安石論は間違つてゐた。間違つてゐたと言ふ言葉に語弊があれば、端的に歪曲されて傳へられてゐたと言へる。彼の新法は全く惡法であつたかの如く取扱はれ、たとへば手許にある大正初期の某氏東洋史精義によれば「神宗在位十八年、勤儉にして畎遊を好まず、宮室を治めず、精を勵して治を圖りたれど王安石に誤られて、一事も意の如くなる能はず、恨を呑みて死し、子哲宗嗣ぐ」と言つた調子で、これでは全く王安石も浮ばれないであらう。實際かう言つた論調の王安石論が、おしなべて世を風靡してゐたのである。全く東洋史學の貧困と言ふべきであるが、その後新しい資料の發見と歴史學の進歩は、在來の王安石論が一方的な史料のみを根據として捏造されたもので、そこに重大な錯誤をふくむことが發見されたが、しかし未だ充分な意味で王安石全體を再検討するものはなかつた。かうしたうちにあつて本